

本棚を眺めてみる

作成者：人文社会科学部 研究科 M1

作成日：2018年2月

はじめに

僕の大好きなアニメーションに、『攻殻機動隊 - STAND ALONE COMPLEX』というSF作品があります。人間の脳をインターネットに直接接続することができる、そんな技術が発達した近未来を舞台とするサイバーパンクな作品です。このアニメには、「外部記憶装置」という用語が時折出てきます。この用語が指す装置はその名の通り、他の記録媒体に必要な情報を保管しておいて、自身の脳をその媒体に繋ぐことで、自分の頭の中でその中の情報を自由に操ることができるようになる、そんな夢のような装置です。こんな装置が本当に存在すれば、世界中の史資料を読むという過程を経ることなく自由自在に扱うことができるのですから、レポートや論文を書くのにどれほどの助けになるでしょう。しかし残念ながら、「外部記憶装置」が僕たちの生きる現実世界で発明されることになるのは当分先になりそうです。

「外部記憶装置」の話をしたのは、他でもない私自身が読書をあまり得意としていないことに端を発しています。当たり前のことですが、レポートや論文を書くためには、本を読むことがとても大切です。ただ、頭ではわかっているつもりでも「論文や専門書を読んでいるとついつい眠気が…、集中力が…」という方は結構な数いらっしゃるのではないかなと思います。実は僕もそうでした。そんなことを言っても始まりません、書くためには読まなくては行けないし、読まなければ書けません。しかし、「読んで書く」ということに不慣れな学部の1年生や2年生、これまで読書という経験がほとんどない人たちは、一つの大きな壁に直面することになるかと思います。それは「一体どんな本を読めばいいんだろう？」という壁です。

本を選ぶ

当然ですが、読むためには本を選ぶなくてははいけません。ですが、世の中にはあまり良くない本というものも存在します。「疑いを持つ」「批判的に読む」ということに不慣れなまま「良くない本」を選んでしまい、真に受けてしまうことの怖さは、想像に難くないかと思えます。「良くない本」の影響を受けてしまったとき、レポートや論文の評価が低くなるということ以上に、考え方の「土台」が良くないものになってしまう可能性があるからです。考え方の「土台」が良くないということは、自分の視野を狭いものにしてしまったり、考えなくちゃいけない問題に対する意識を欠如させてしまうかもしれないからです。そのことはもしかすると、誰かを意図せず傷つけることに繋がってしまうかもしれません。僕自身そのことはとても怖いですし、きっと誰だって嫌ですよ。

どうせ読むなら「良い本」がいい、でも「良い本」ってどれだろう…どんな本が「良い本」なんだろう…誰だって最初はわかりません。予想できるような答えで申し訳ないのですが、「良い本」を知るための方法としてオススメなのは「先生に訊いてみる」です。所属する学部や学科、ゼミなどによっては、はじめに先生から読んでほしい、読むべき本のリストなどを渡されているかもしれません。もしちょっと先生との距離を感じるようであれば、先生の執筆なされた本や論文を読んでみるのも一つの手です。

本の読み方

ところで、先ほどから私は「良い本」「悪い本」というように括りにして話を進めさせていたのですが、ここで一つの留保を付けさせてください。「良い本」や「悪い本」とは一体何でしょうか？「良い」とはどういうことで、「悪い」とはどういうことでしょうか？答えは人それぞれ違いますし、研究している分野などによって異なって来るかもしれません。それに、「良い本」「悪い本」とされているものも、捉え方や時代状況によって変わってきます。また、「良い本」に妄信的になることもあまり良いこととは言えません。

学問に携わるということは、批判と改革の責任を負うということでもあります。これまでの研究成果や歴史認識など、「当たり前」とされていたことを疑い、より物事のコアへと迫っていく。そのためには先に述べた「疑いを持つ」「批判的に読む」という姿勢が重要です。「この本は良い本だからその通りにしよう」ではなく、読んだうえで考え、疑問を持ち批判へと、あるいは応用し自分自身と繋いでいく。そういった心持ちで読書に臨むと、より良い経験となるはずですよ。

このことを逆手に取れば、「悪い本」を読むということは「批判的に読む」ということの良い訓練となるはずですよ。「この人はなんでこんなひどいことを言っているんだろう」「このような認識がどうして受け入れられているんだろう」こういったところから問題意識が明確になり、歴史的な文脈が分かってくるということも往々にしてあります。「良い本」も「悪い本」も捉え方次第では、毒にも薬にもなるということですよ。「素直に読む」ことも、「疑って読む」ことも同じように大事だということをお忘れずに読書に臨んでもらえればと思います。ぜひこの小文も、批判的に読んでみてください。そして自分なりの塩梅を、たくさんの経験から見つけていくきっかけになれば幸いです。

本棚へ

では、皆さんは読むべき本を知ることができました。その本を手に入れるために皆さんにオススメしたいのは、ぜひ書店や図書館に赴いてほしい、ということです。

ネットショッピングが普及した現代では、実際に足を運ばなくても書籍を手に入れることはできるので、もしかしたら少し面倒に感じてしまうかもしれません。ネットだと、実店舗に比べて在庫がないということも少ないでしょうし、また古本などを簡単に、しかもかなりお得に手に入れることが出来たりもするので、否定するつもりは全くありません。それに、今では書店や図書館でもパソコンやスマートフォンなどの端末、店員さんや係の方などに訊けば目当ての本がどの棚にあるかはすぐにわかりますし、図書館だと請求番号が振られているのでラベルを追っていけば、目当ての本にすんなりと辿り着くことができます。つまり、必要な情報を最小限に目当ての本を見つけることができる、ということです。これらは忙しい人にはとても助かる、素晴らしいサービスです。こういったサービスを利用して目当ての本を手に入れることはもちろん悪い事では全くありません。しかし、目当ての本だけを手にして帰ってしまうのは、実は少しだけもったいないことなのです。

これを読んでくれている方にはぜひ、少しだけ時間に余裕をもって書店や図書館を訪れてほしいのです。タイトルにもある通り、本棚を眺める時間を確保していただきたいからです。では、「本棚を眺める」ということについて少しだけお話ししたいと思います。

本棚を眺めてみる

目当ての本が置いてある本棚に辿り着いた皆さんには一度、その本が置いてある棚の全体をぼんやりと眺めてみてほしいのです。当然同じ棚にあるので、探していた本と近いテーマであったり、あるいは興味を惹くタイトルの本が数冊ほど見つかるはずですよ。

では、それらの本を手にとってみて、目次をめくってみてください。目次には当然、その本に書かれている内容が示されているので、「こんな本もあるんだ」と何となくでいいので目を通してみましょう。同じことを別の本、別の本と繰り返していると、その棚にある本のことが少しだけわかってきます。「政治学」や「日本史」、「経済学」などと様々な銘打たれた棚の中には、同じ枠組みの中でも近いようで遠い、遠いようで近い、そんな本たちが一挙に並べられていることがわかるはずですよ。

もしあなたがその棚に興味を持つことが出来たのなら、その学問領域に興味を持つことができた、といっても過言ではないと思います。

では一度、目当てだった本を通読してみましょう。書かれていることを理解できたでしょうか？もしかしたら難しく、全ては理解できなかったかもしれません。あるいは、とても良い読書体験となって、もっともっとそのテーマに興味が出てきたかもしれません。興味が湧いてきたときは言わずもがな、理解できなかったなと感じたときでも、別の資料が必要になってくるかと思います。

もういちど本棚へ

では、また資料を探して書店や図書館に行ってみましょう。そこでも以前と同様に棚を眺めてみてほしいのです。一冊以上の本を読んだあなたは、もう以前のあなたとは違うはずです。あの時は持っていなかったような関心や興味、あるいは考え方を持つことができていると思います。以前は興味がなかった本にも関心が向くかもしれません。また以前めくって見た本でも、再度目次を見てみると先に読んだ本と近いところや遠いところ、あるいは論じられていなかった問題が見つかるかもしれません。違う棚であればよりラッキーです。別とされる学問領域に興味を持つきっかけを得ることができたということです。あるいは、そもそも以前訪れた書店や図書館とは違う場所に足を運んでいるかもしれません。A図書館にはなかった本がB書店にはあるということは、同じような棚でもその中身は異なっている、ということです。そのことは、以前眺めた本棚にはなかった本たちと出会える可能性があるということなのです。

おわりに

この作業を何度か繰り返していると、例えば本を読んでいる途中にふと「そういえば、似たようなことが書かれてそうな本がA図書館にあった気がする」「ここで使われている本はB書店にあったと思う」といったことが起きてくるのはもちろん、「〇〇さんはこういったことを研究されている方なんだな」「今のテーマに××のような研究は活かせるかもしれない」ということも、ぼんやりとですが思いつくようになってきます。勘の良い方はもうお気づきかと思いますが、「本棚を眺めてみる」ことは、疑似的な「外部記憶装置」を作り出すことなのです。もちろんアニメのように便利なものではありませんが、この「外部記憶装置」はむしろ、それを作り出す過程において有意義なことであると思います。様々な興味や関心、問題意識の下で書かれた本に出会うことは、レポートや論文をより良いものにするだけでなく、現代社会を生きていくうえでとても大事で、素敵なことだと思います。もしお時間がある方は是非、本棚を眺めてみてはいかがでしょうか。

○参考文献

高田明典『難解な本を読む技術』光文社、2009年

酒井直樹『ひきこもりの国民主義』岩波書店、2017年